

## 東大使からのメッセージ（「大使館便り」7月号より）

平成26年7月1日

皆様、御健勝にて御活躍のこととお喜び申し上げます。

リスボンもここ数週間は本来の快晴が戻ってきており、このまま、夏の到来を迎えられればと願っています。

最初に、6月21日の「フェスタ・ド・ジャパン」開催に際しましては、皆様の御協力を賜り、本当にありがとうございました。

「フェスタ・ド・ジャパン」は、大使館とリスボン市等が共催で行う「日本祭り」で今年4回目を迎えました。市内のベレン地区にある「日本公園」には、昨年同様多くの来訪があり、大盛会の内に成功裡に終えることができました。この日の多くの公演の中で、日本から昨年に引き続いて立命館アジア太平洋大学（APU）の学生グループが、和太鼓の演奏や「よさこい踊り」を披露して、大変躍動的で迫力のある舞台は、喝采を浴びていました。

また、熱海市から「御神輿」が来訪し、日本公園を元気よく練り歩き、「祭り」の雰囲気を一気に盛り上げて頂きました。この「御神輿」は、大変精巧なつくりで日本の工芸技術の素晴らしさにポルトガル人も感嘆の声を挙げていました。この「御神輿」は翌22日に、熱海市の姉妹都市である「カスカイス市」に寄贈され、寄贈式には、熱海市長、カスカイス市長とともに私も出席し、両市の交流事業にも参加致しました。

なお、「カスカイス」市のポウザーダで在ポルトガルの13人の大使が「カスカイス市」で撮った写真の展示会「外交と写真展」が開催されており、私が撮った写真3点も展示されていますので、機会がありましたら是非御覧下さい。これは、「カスカイス市」650周年の記念行事として催されたものです。

さて、先月のメッセージで「**安倍総理のポルトガル訪問**」について、今後詳しくお知らせする旨お約束しましたが、今回は、「シャンパリモ一財団」訪問を御紹介したいと思います。

安倍総理は、5月2日、空港到着直後にホテルに立ち寄ることなく、同財団を訪問して「現在のポルトガルの科学技術・研究や医療水準の高さ」を実感されました。また、この訪問に基づき、今後、学術的・知的交流を一層促進するとともに、最先端医療の分野等、科学面でのポルト

ガルとの協力の可能性を探求することが「共同コミュニケ」にも明記されました。

「シャンパリモー財団」は、20世紀のポルトガルの大富豪・故アントニオ・ソメール・シャンパリモー氏（1918-2004）の遺志により設立・運営されている、脳神経科学とガンの最先端医療研究施設です。世界中から気鋭の研究者を集めており、日本からも3名の研究者が脳神経科学の研究をされています。

安倍総理は、ベレーザ理事長の案内で、財団の施設「シャンパリモー財団・未知の世界センター」（2010年10月開館）を視察しました。同「センター」は、テージョ川に面し、バスコダガマが世界に乗り出した「ベレンの塔」の大西洋側にあり、施設自体が、大西洋側から見ると大西洋に船出する船舶の形をしています。全館総ガラス張りで見通しが良く、安倍総理も窓から見えるテージョ川の美しさに感嘆しておられました。

同施設は、本館のA棟と講堂・レストランのB棟からなり、その間を渡り廊下でつなげる構造になっています。総理は、A棟1階から、クリニック中庭を経由して、クリニックのキモセラピー（抗がん剤治療）棟に移動し、癌治療の世界最先端の医療機器を視察されました。同医療機器は、通常は27段階もかかる手術・治療の過程を数分で実施可能なケースもあるとのことで、欧州各地からこの手術を受けるため日帰りで患者が来訪する事例もあるそうです。また、キモセラピー棟は、癌患者及びその家族にとっても素晴らしい治療環境を備え、「癒しの空間」を構成しており、患者用の治療スペースが航空機のファースト・クラスをイメージした空間となっており、緑豊かなクリニック中庭と美しいテージョ川を望むことができます。また、キモセラピー棟では、テラスに出て、野外で治療を受けることも可能となっています。

このようにクリニック棟は、世界最先端の技術、機材を備え、患者の「癒し」にも配慮した、世界でも最高水準の医療環境となっています。

A棟2階は脳神経科学の研究棟で「オープン・ラボ」となっており、総理は、ここで日本人研究者3名（野本謙作氏、村上誠祥氏、藤原輝史氏）に会われ、同財団の素晴らしさを確認するとともに、研究者を激励されました。同研究者によれば、同ラボの研究水準は極めて高く、素晴らしい研究環境で、窓が大きくテージョ川を臨めるスペースでは、研究の疲れを癒し、新しいアイデアも湧くとのことでした。

B棟では、講堂前で、総理は、利根川進 MIT 教授にも会われました。利根川教授は、同日午前中に、他の2名のノーベル化学賞受賞者とともに同財団で開催されたシンポジウムに出席されていました。利根川教授は、シャンパリモー財団の科学評議会メンバーも務めておられ、同財団

とは緊密な関係にあり、同財団の建物建設に当たっては、同教授が建築家を紹介されたとのことでした。安倍総理の訪問に合わせて、同教授を招待したベレーザ理事長の粋な計らいでもありました。

このベレーザ理事長は、現在与党の社会民主党に属し国会副議長、保健大臣を歴任した方で、ポルトガル政界、社会の有力者でもあります。ベレーザ女史は、故アントニオ氏の遺言で指名されて、2004年、同財団の理事長に就任し、今日に至っています。

また、余談ですが、上記講堂の巨大な大窓から大航海時代にバスコダガマが出航したとされる「ベレンの塔」が望めますが、この大窓のガラスは特殊ガラスで日本製(日プラ株式会社)との事で、ここにも日本の高度な技術が息づき日本との協力関係を示すものとなっています。

安倍総理は、同センターで、「ポルトガルに到着後、最初に訪れるのが先端医療科学の殿堂「シャンパリモー財団・未知の世界センター」であり、未来志向の両国関係の構築を象徴するようである。日本人の死因第1位である癌をはじめ日本も先端医療分野の研究に力を入れており、私の訪問を契機としてこうした分野でも両国間の協力関係の強化を期待する」旨述べられ、総理のポルトガル訪問のキックオフとして素晴らしいスタートとなりました。

次号以降引き続き「安倍総理のポルトガル訪問」について、順次お知らせ致します。

季節の変わり目にあたり、皆様にはご自愛の上御活躍頂きますようお願い申し上げます。